

憧れと愛を求めて

初版の詩集(再版)



飛鳥 圭

序

序

この書籍「憧れと愛を求めて」は朝日カルチャーセンターで製作したのですが発行してから長い年数が経っており現在廃版となり、増刷ができません。

このまま埋もれてしまうにはしのびなく、詩の好きな方々が少しでも楽めることが出来ればいいなあとあってpubooを利用して執筆編集をしていくことにしました。

実はこの詩集は飛鳥圭の初の詩集なのです。

こんなことがあった、あんなことがあったと皆様と同じような気持ちを綴った詩もあるのではないだろうかと思っているのです。

幸い5月15日に執筆、編集も完成し、新たに電子書籍で発行することができました。

この詩集は国立国会図書館等に所蔵されているようなのですが、身近なところで誰にでも読んでいただけることができましたらポエト（詩人）として嬉しく思います。

瀬戸大橋の見ゆる Hashicafé

にて

2018年5月15日

飛鳥 圭

初 版：1991年7月

再版：2018年5月（電子書籍にて）

目次

目次

I 第1章 憧れと愛を求めて

- * 憧れを求めて・・・3
- * ふりむけば愛・・・4
- * ごめんなさい・・・5
- * 明日は現実として・・・6
- * 青春 i n g・・・7
- * もどれない・・・8
- * 覚えていますか・・・9
- * いつものところ・・・10
- * 愛がほしい・・・11
- * あなたの通る道・・・12
-
- * 私のガールフレンド・・・13
- * 夢のなかで・・・14
- * 風が愛を運ぶ・・・15
- * あたたかい心・・・16
- * 愛を下さい・・・17
- * いつもあなたと・・・18
- * いつものことです・・・19
- * 愛していればこそ・・・20
- * 片隅の小さな喫茶店で・・・21
- * 愛をかくさないで・・・22
-
- * 風が運ぶもの・・・23
- * 夏の終わりに・・・24
- * 愛でつつんで下さい・・・25
- * 思いつづけて・・・26
- * 雪の朝・・・27
- * 春風にのって・・・28
- * 2月が大好き・・・29
- * 笑顔にこんにちは・・・30
- * 愛のちはれ・・・31
- * 信じていい！・・・32

-
- *明日に向かって・・・33
 - *夢からさめても・・・34
 - *消えない愛・・・35
 - *もどって下さい・・・36
 - *愛を伝えます・・・37
 - *夢にまでみてしまった・・・38
 - *愛よ再び・・・39
 - *22歳になった君に・・・40
 - *愛を残せるなら・・・41
 - *としの差なんて言うけれど・・・42

-
- *愛しているのに・・・43
 - *もうひとつの僕・・・44
 - *別れたあと・・・45

II 第2章 憧れとともに

- *憧れとともに・・・1
 - *チャリンコにのって・・・2
 - *春が来れば・・・3
 - *あなたのもとへかえります・・・4
 - *ペットをふけばいい・・・5
 - *愛よ未来へ行け・・・6
 - *心の窓がブルーなら・・・7
 - *苦しめる憧れ・・・8
 - *本当にごめんなさい・・・9
 - *祈りたいときには・・・10
-
- *おまじない・・・11
 - *私のなかのあなた・・・12
 - *夢の国・・・13
 - *お嫁さん・・・14
 - *贈りもの・・・15
 - *あなたの好きなレコードは・・・16
 - *すべて大好き・・・17
 - *私の天使は・・・18
 - *人恋しいとき・・・19

- *別の顔の私・・・20
-
- *結婚行きの列車・・・21
- *眠れないとき・・・22
- *朝の夢・・・23
- *少女のなかの憧れ・・・24
- *あなたを待つ時間・・・25
- *民話の世界に行こう・・・26
- *さようなら・・・27
- *少女への恋心・・・28
- *夢のなか・・・29
- *ひきつける何か・・・30
-
- *山の友へ・・・31
- *ほほえみを下さい・・・32
- *二人だけのX'mas・・・33
- *明日もいいことが・・・34
- *春はいいなあ・・・35

III 第3章 貴方の心のなかへ

- *あなたの心のなかへ・・・1
- *過去の恋・・・2
- *幻想の世界にいる・・・3
- *夢であいましょうか・・・4
- *手袋をあげます・・・5
- *みんな友だち・・・6
- *ひとり暮らしのあなたへ・・・7
- *他人の眼・・・8
- *やっと気になるとき・・・9
- *心をかえよう・・・10
-
- *カムバックできる！・・・11
- *あと5日で・・・12
- *秋の深まりに・・・13
- *私のなかにいるあなた・・・14
- *これが恋なのですか・・・15
- *語り会おう・・・16

- *星の国から・・・17
- *電撃結婚をしたい・・・18
- *愛をおみやげに・・・19
- *愛の旅路・・・20
-
- *愛の始まりでしょうか・・・21
- *心のなかを散歩しましょう・・・22
- *死んでみたら！・・・23
- *愛を感じて下さい・・・24
- *飛行機にハートをのせて・・・25
- *二人で飲もうよ・・・26
- *あなたは妹・・・27
- *あなたにさよならしたら・・・28
- *ぼくを追いこさないで・・・29
- *信じること・・・30
-
- *心の電話・・・31
- *いつもの通りかな・・・32
- *心はしけもよう・・・33
- *瞳を閉じれば・・・34

IV 第4章 愛を探して

- *愛を探して・・・1
- *よろいをもとう・・・2
- *失意でも希望が・・・3
- *霧のなかのあなた・・・4
- *どこか遠くの街へ・・・5
- *恋とはちがうなにか・・・6
- *初恋のあじ・・・7
- *恋人とおもっています・・・8
- *私とあなたの雲よ・・・9
- *ひとつのきっかけから・・・10
-
- *あのときのあなたへ・・・11
- *19歳のあなたは・・・12
- *大人の恋・・・13
- *眠りなさい・・・14

- *本当はすごく会いたい・・・15
- *聞き役もいい・・・16
- *思い出の箱・・・17
- *若い力・・・18
- *もう卒業ですか・・・19
- *あなたの写真をみれば・・・20
-
- *泣かせないで下さい・・・21
- *だまって帰っちゃおうかな・・・22
- *妹へ・・・23
- *街の灯・・・24
- *別れの手紙・・・25
- *孤独の終わり・・・26
- *いっばいの愛・・・27
- *春は夢のよう・・・28
- *いつも二人で・・・29
- *小ちゃな世界・・・30
-
- *憧れの君・・・31
- *いつかある日・・・32
- *虚勢とは・・・33
- *行動が気がかり・・・34
- *さえぎるもの・・・35
- *問いかけてみる・・・36
- *ピクニックへ行こう・・・37
- *あなたを感じる・・・38
- *心のなかで止まって下さい・・・39
- *とまどい・・・40
-
- *気持ちを伝えて下さい・・・41
- *素直さを出そう・・・42
- *エンジン全開だ・・・43
- *ペンネーム飛鳥圭について・・・44

V 第5章 夢を追って

- *夢を追って・・・1
- *僕だけに感じるのか・・・2

- *愛するあなた・・・3
- *明日がある・・・4
- *ちょっぴり不安・・・5
- *あなたのもとへ・・・6
- *幸せと悲しみと・・・7
- *バスストップで・・・8
- *俺は男だ・・・9
- *ある夏の日・・・10
-
- *秋の風は・・・11
- *冬にさようなら・・・12
- *起きて下さい・・・13
- *私のお城・・・14
- *失恋なのか・・・15
- *汽車の来ない線路・・・16
- *愛するあなたなのに・・・17
- *夢でないように・・・18
- *服をあげよう・・・19
- *なぜだろう・・・20
-
- *あなたのぬくもり・・・21
- *虹が出れば・・・22
- *写真ができたら・・・23
- *淋しいのですか・・・24
- *私にもわからない・・・25
- *あの娘が泣いた・・・26
- *星が降る日・・・27
- *愛する姫君へ・・・28
- *そしてgoing・・・29
- *あなたは風なのですか・・・30
-
- *呼んでもかえらない・・・31
- *孤独・・・32
- *あなたに甘えよう・・・33
- *あまりにもはやい・・・34
- *出来れば早く・・・35
- *メルヘンの世界の中で・・・36

*少女に夢をみつけた・・・37

*明日にむかて・・・38

*土曜休暇は・・・39

*X'masイブは・・・40

詩集：憧れと愛を求めて F I N E

第1章1

—憧れを求めて—

憧れは誰にでもある

愛は誰にでもある

しかし

憧れと愛を求め続けていくことは
青春のときならそれも可能であるが
なかなか出来ないことである

でも いくつになっても

憧れと愛を求めていくことは
とても素晴らしいことと思っている

素晴らしき明日に乾杯

あなたからの愛と

僕からの愛に乾杯

第1章2

—ふりむけば愛—

クラシック音楽の流れる

・・・夕暮れの喫茶店

窓際のガラスに

君の面影を写して

そっと口づけをした

初冬の街外れで

口づけを交わした

あの日が

よみがえってくる

ふと ふりむけば

・・・君の笑顔がいた

うれしい驚き

そっと君の手に

・・・口づけをする

第1章3

—ごめんなさい—

ありし日の
君に似た女性に出会えれば
神の導きと考えて
愛してしまうかも知れない
・・・どうしてだろう

この世によみがえりし君と思い
幸せにしたいという気持ちが
心のどこかにあるのだろうか

そんな自分に・・・
人を愛する資格があるのだろうか
新しい愛の出発として
励ますもう一人の自分がいる

愛する女性は
神に召された妻ただひとりでは
なかったのか
・・・ごめんなさい

第1章4

—明日は現実として—

明日からまた早起きして
・・・通勤が始まります
毎日あなたの笑顔に会いたい
初冬のひきしめる冷たい風と
・・・あなたとの語らい

ひとつのコートに身をつつみ
恋人らしく振る舞いたい
そして 黄昏のひとつときを
落ち葉を踏みしめて
二人だけの時を演出する

明日はきっと
素敵な一日をつくろう
コートの中が二人の愛で
・・・いっぱいになるように

第1章5

－青春 i n g－

いつからか・・・

青春 i n g がはじまった

春は春の青春 i n g

夏は夏の青春 i n g

秋は秋の青春 i n g

冬は冬の青春 i n g

冬の青春 i n g は

あなたとの・・・

楽しい d i n n e r

ネオン街を腕組しての散歩

寒さなんて気にならない

二人して頬を染め

夢の世界・・・

愛の旅路へ消えていく

第1章6

—もどれない—

少年の頃より求めていた
憧れが見つかった
でも気づいてみると
僕の歳は過去に
あともどり出来ない

夢にまで見た憧れなのに
現実はずっと離れて行く
少年の頃に戻れない淋しさと
孤独が追いかけてくる

今の憧れは
ひとときの安らぎとしての
夢なのだろうか
それともまだまだ続く
夢なのだろうか

第1章7

—覚えていますか—

9月1日、君との・・・
初めての出会い
少年の頃にもどって
心の乱れを抑えることが
出来ない自分を見つけた

君へ何を期待するのか
僕にはわからない・・・
ひとつだけ言えることは
君への憧れは・・・
消えないと言うことである

君との一日を大切にしたい
君に出会えたことを幸せに思う
一秒でも・・・
君と長くいたい

第1章8

—いつものところ—

”いつものところで”

何気ない言葉が

秘密めいていて

二人だけの特別な場所のよう

君とのいつものところでの約束は

心をときめかせる

何を話そう、先に来てるかな

僕を待つ君の姿があれば

思いきり抱きしめたいほど

うれしい・・・

君といれば・・・

時間の経つのが速いのはなぜだろう

過ぎし青春と同じに

時は早く過ぎていく

時が止まればいいのに・・・

第1章9

－愛がほしい－

どれくらいあなたに近づいたか

・・・を考えてみた

別れたあと、あなたの面影を

・・・思い出せない淋しさに

ふとあなたからの愛がほしい

気持ちになった

これから機会があれば

あなたに会いたい

一人の男性として

あなたのことをもっと知りたい

あなたの全てを脳裏に刻むまで

果てしない月日を・・・

必要とするかも知れない

また、途中で挫折するかも知れない！

いろいろな事が交錯し、迷う気持ちを

行動によってふり払うことが必要だと

自分に言い聞かせる

第1章10

—あなたの通る道—

地下鉄淀屋橋をおりて

大江橋を渡る

まじかに中ノ島遊歩道

川沿いの街灯

石造りのベンチ

肩をよせあうカップル

夕暮れの川面に映える

ネオンと初秋の風が

頬に心地よい午後7時

あなたは毎日・・・

ここを通るのですね

今日も素敵な笑顔を残して・・・

私のまえを通りすぎていきます

第1章11

ー僕のガールフレンドー

3月生まれの21歳

素直さと

全体のやさしいイメージが

初恋の人に似て好き

口紅もマニキュアも

ひかえめなところが

かわいい

視線を交わすと

はじらいの笑顔が

かえってくる

いつまでも

変らないでほしい

僕の憧れの女性だから

第1章12

—夢のなかで—

手の届かぬ
君を想いうかべて
冬の道を歩く

足音だけが
こだまして
君との語らいが
楽しくよみがえる

しあわせで
胸がときめいた日々
うしろをふり向くと
君がいた

大きい声で
さけびたい
君を愛していますと

第1章13

ー風が愛を運ぶー

春の風

それはあなたのほほえみ

夏の風

それはあなたの

そよ風のようなやさしさ

秋の風

それはあなたとの心のふれあい

そして今 冬の風

それは寒さを感じさせない

あなたのあたたかな愛

そしてあなたへの愛に

気づく心の安らぎ

第1章14

－あたたかい心－

帰路の電車の窓に
あなたの面影を映して
そっとほおをよせてみた

冬の冷たさが
伝わってくるだけなのに
なぜかあたたかい
あなたとの心のふれあい

第1章15

—愛を下さい—

あなたの視線に
愛をかんじて
青春がよみがえる

若い瞳に
見つめられると
胸がいっぱいになります

瞳に語りかけられることって
とてもうれしい
言葉もいらない

ただそばに居てくれるだけで
幸せをかんじます
私に愛をください

1章16

ーいつもあなたとー

パスケースに
あなたの写真を入れて
いつもデートをしています
あなたの声が
聞こえてきます
あなたのやさしさが
伝わってきます

あなたをみるたびに
体に気をつけなくちゃと思います
でも本当は本当のあなたと
毎日会いたい

・・・大人ですもの
写真でがまんです
あなたもおなじ
気持ちでしょうか・・・

第1章17

－いつものことです－

いつものことです
朝寝坊したときは
朝食をつくりません
ゆきつけの喫茶店で
モーニングです・・・

コーヒーのあたたかい
ほのぼのとした香りが
あなたに会っているような
気がして好きです
”おはよう”
・・・聞こえますか

第1章18

－愛していればこそ－

お手紙はふざけたことを
書きません
本当の心を書きます

愛を確かめあうまでは
あなたの心を読んで
お手紙を書きます

手紙は心を
あらわすものだから
このまえのお手紙
お許してください
心にもないことを
書いてしまって・・・

第1章19

－片隅の小さな喫茶店で－

街はずれの片隅の
小さな喫茶店でコーヒーを飲む
女性誌の
ファッションに目をやりながら
モデルの顔があなたに
見えてくる

二度目の恋は実るものと
思っていた考えの甘さに
コーヒーの味がほろにがい
夕暮れの街並みを走る
愛車のハンドルさばきも
どこか淋しい

夕やみのなかに
消えてしまいたい気がする
そんな一日
淋しい長い日曜日
ほんとうであれば、今日は
あなたとの楽しい語らいの日で
あったのに・・・

電話が鳴れば
あなたかも知れないと
期待する情けない男が一人いる
あきらめてしまって、次の
希望を持たないと
自分に言い聞かせ
一番長い夜を迎える

第1章20

—愛をかくさないで—

お会いできないこと
とてもつらい
住んでいるところも
わかっていながら
恋の終わりですもの
あきらめなければ

最初が悪いのです
あなたがとても
素敵すぎました
また大きい愛で
私をつつんでくれました

でもあなたは素直でなかった
自分の気持ちを殺している
とても残念です

自分に素直になって下さい
今の気持ちを
正直に出して下さい
愛をかくさないで・・・

第1章21

－風が運ぶもの－

風が運ぶものは
やさしさと
あなたの口づけ
ときには子供っぽい
甘えもうれしい

風が運ぶものは
失恋の悲しい調べと
ふるさとの父と
母の呼ぶ声

風が運ぶものは
希望と
明日の青春の詩
そして新しく出会う
人々との語らい

風よ
幸せとよろこびを
運んでおくれ

第1章22

－夏の終わりに－

潮風にふかれて
長い髪がおでこをなでる
夏は終わった・・・

あの賑わいは姿を消し
貝殻や海水浴客の
忘れものらしき麦わら帽が
僕の眼にとまる

赤い色の
かわいい帽子のなかに
ひとつ、ふたつ
貝がらを入れながら
波のリズムを耳にする

少年のころの
歌を口ずさみ
心の疲れを波に返す
夏の終わりのひととき

第1章23

－愛でつつんで下さい－

もうじき冬が来る
この寒さが
この冷たさが
体にしみわたるとき
心に暖かさがほしいと思う

この寒さが
この冷たさが
心にしみわたるとき
あなたの愛がほしいと思う

第1章24

－思いつづけて－

あなたの誕生日には
花束を贈りたいと思います
花束の届いている間は
あなたのこと
忘れていない証しです

私を愛してくれるなら
返事を下さい
いつまでも待っています

でも
花束が届かなくなれば
あなたへの想いは
終わったのです

第1章25

－雪の朝－

恋人らしき
足あとふたつ

そのあとに続く
あなたと私の足あと

肩を寄せ合い
楽しい白い語らい

前に続く
足あとと同じになり
二人してほほえむ
雪の朝

第1章26

ー春風にのってー

あなたへの愛を
箱いっぱいにつめて
春風が
くるのを待ちます

春風よ
早く来て下さい
春風は幸せを運ぶ
暖かい風です

春風にのって
あなたのもとに
飛んでゆきたい
気持ちです

第1章27

－ 2月が大好き－

なぜ2月が好きですか
あなたとの初めての
心のふれあいが
あったから

なぜ2月が好きですか
あなたのやさしい声が
私の心を大きく
包んでくれるから

なぜ2月が好きですか
それはあなたにもいえない
でもそっと
心の中でいいます
あなたに
愛を感じていますと

第1章28

—笑顔にこんにちは—

あなたの微笑が
夏風に吹かれて
ぼくのほほを打つ

やさしさを風が
かわって伝えてくれる
そんなあなたの笑顔が
好き 好き 好き

また会っておくれ
もし会えなければ
風にぼくへの想いを
伝えておくれ

そして大きな愛を
届けておくれ
ぼくにだけに
早く早く
届けておくれ
ぼくのあなただから

第1章29

— 愛のちはれ —

朝日のまぶしさ
あなたに似て
陽のあたたかさが
伝わる時
あなたへの想いが
胸をつらぬく

初夏の風に
ふれる時
あなたとの
さわやかな抱擁を
思い心がなごむ

また会える日まで
いままでの想いを胸に
朝もやに
あなたの面影を写して
そっと口づけをする

朝の心地よい空気が
やさしく頬を包み
我にかえる
素晴らしい
一日の始まり
あなたとの一日が
また始まる

第1章30

－信じていい！－

きみの音が
聞こえない
きみの声が
聞こえない
そんな一日は
ほしくない

きみの音が
聞こえるとき
一日のやすらぎを覚える

明日も
きみの音が聞こえると
信じたとき
今日の楽しさがある

会えなくたって
いいんだと
きみの写真に
そっと口づけをする

第1章31

－明日に向かって－

過去をふりかえるのはもうよそう
太陽は全てを照らすのだから
私も幸せになるのだと信じることだ

明日のことはわからないけれど
今よりはよくなっている明日であるために
今一日満足な心でいれるようにしたい

やさしいひとがそばにいないと
愛してくれるひとがいないと何かさびしい
そんな男もいるということを知ってほしい
私の心を知り始めたあなたへ

第1章32

－夢からさめても－

やっと会える
愛しいあなたに
会えるまでの
電車のなかの
2時間あまり

胸が熱くときめき
結ばれた
夜のことを想いだし
いつしか眠ってしまう

ふと目覚めると
僕のそばに君がいた
やさしいくちづけと抱擁
やっと現実にかえる

窓越しの朝日が
二人を紅く染め
向かいあったまま
じっと見つめ合う

第1章33

－消えない愛－

ぼくの心の中に
君がいて
じっと見つめている
消しても消しても
見つめている

二人の愛は
終わったのに
なぜか君がいて
じっと見つめている

君をおもいきり
抱きしめてみると
君が消えてしまった
ぼくの心の奥深く
住みついたのだろうか

君との永遠に
忘れられない思い出
君との愛が
また始まるのか

第1章34

—もどって下さい—

なぜ君は
聞こえないのだろう
愛のことばを
なぜ君は
話せないのだろう
愛のことばを

なぜ君は
逃げているのだろう
愛のことばから
なぜ君は
心を閉ざすのだろう
愛のことばから

いつもの笑顔と
いつものやさしい言葉と
いつもの君に
もどって下さい

第1章35

－愛を伝えます－

会えば離れたくない
離れていれば
君のことばかり
恋の始まりでしょうか

いつものときとは
少し違う心のときめきを
あなたは知っていますか
ぼくの心のさけびを
聞いて下さい
ほら聞こえるでしょう

あなたへの
心へと進んでいる
ぼくの愛の言葉を
いつかはあなたの心の中へ
入っていきます

そのときはよろこんで
むかえて下さい

第1章36

—夢にまでみてしまった—

あなたを最後の
女性として考えたい
一日だけでいい
朝まで愛することを
許してほしい

まじめに考えても
僕の青春とは言えない
憧れかも知れない
でも今日現在あなたを
たったひとりの女性として
どうしようもなく
好きで愛してしまった

ひとつの儀式として
あなたと結ばれることで
僕の心に
消えない思い出として
永久に残しておきたいと思う

第1章37

－愛よ再び－

じっと見つめて
おれないものがある
それは太陽と
愛する人の死

愛する人は
太陽である
いつか再び
心のなかが太陽の光で
いっぱいになることを
信じたい

そして今は秋
秋の風は
やさしいあなたからの
愛のメッセージを
運んでくる

第1章38

—22歳になった君に—

ひとつずつ
歳を重ねるたびに
女らしく
女性として素敵に
なっていく君をみて
うらやましく思う

今日は
あなたの誕生日ですね
若い乙女に
若い純真な乙女に乾杯

まぶしい瞳を
僕にだけ下さい
僕の瞳でやさしく
包んであげよう

第1章39

－愛を残せるなら－

君の面影が
心から消えなくなった
僕には恋は寛容で
耐え忍ぶことの
限界にきたようです

僕も精神的に
成長しなければ・・・
君に近づきすぎました
君への想いを
たち切るため
何かに没頭したい

でも君との別れは
淋しすぎる
僕からの愛を
君の心に残して

星のように
いつまでも
輝く愛にしたい
今日も眠れない

第1章40

ーとしの差なんて言うけれどー

僕が今、神に召されたとしたら
そして15年経ったとしたら
僕の歳は止まったままではないか

これなら君との歳の差も
気にならない そして
君を僕のものにできる勇気もでる

君と愛し合うことが叶うなら
死んでもいい
それが僕の望みとしたら
君は怒るかな
それとも・・・

第1章41

－愛しているのに－

夜の世界で
けなげに働く乙女よ
いつかは誘惑に負けて
清き体を
汚していくのですか

好きでもない
男性によって
清らかな心を
汚していくのですか

かわいくって
清純な乙女よ
夜の世界に染まって
しまうのですか

この世の
すみからすみまで
知り尽くし
言葉も巧みになって
しまうのですか

ここでは愛については
本気になっては
いけないのですか
何かしら
悲しくなってきました

第1章42

—もうひとつの僕—

いつまでも少女のように
純真な心と笑顔を
忘れないで下さい

ここは男たちの
オアシスである
泉はあふれ
乙女たちは天使のように
ふるまい楽しませてくれる

天国であり
別世界である
またご一緒しましょう
ここでの時間は
駆け足で過ぎてしまう
すぎし日の
青春のように・・・

第1章43

－別れたあと－

別れたあとの
帰りはつらく、淋しい
楽しい一日が過去として
遠くに消え去り、
再び会えない気がするの
はどうしてだろう

僕は君を愛して
しまったのだろうか
電話でいい
昨日の続きがほしい

時間を気にしないで
連絡してほしいと思う
こんな純な男もいることを
・・・知っておいてほしい
君もこれから
男性を愛するなら

第2章1

—憧れとともに—

君は僕の憧れとともにやってきた
道行く人と同じように
・・・同じテンポで
そう、自然に僕の心の中に・・・
僕の憧れを知っているかのごとく

素直な気持ちで
清らかな心で
本当ですか・・・
僕とともに歩いてくれるのですか

僕の憧れとなって・・・
僕の心の中に消えて下さい

第2章2

ーチャリンコにのってー

街並みをチャリンコで駆ける

人の話し声や

・・・売り子の声

いろんな店を横目で見ながら

駆け抜けていく

1kmも行けば・・・

田畑や野原がひらけ

れんげの花が春を告げる

少し汗ばむ春の日ざし

カーデガンを肩にかけて

煙草に火をつける

この一服が何ともいえない

もうすぐ・・・

君に会えるのですね

第2章3

－春が来れば－

春が来れば 愛の灯がともり
春が来れば 幸せが運ばれ
愛は春とともに 幸せは春とともに
何処からともなくやってくる

春はそこまできているのに
何のためらいがあるのですか
春は手をのばせば届いてしまうのに
なぜかもどかしい

春のおとずれは・・・
あなたへの愛のしるしです
春はまもなく・・・
まもなく近づいてくる

口笛を吹きながら近づいてくる
川辺は 陽光で輝きを増して
小鳥たちのさえずりとともに
あなたの愛をむかえるのです

第2章4

—あなたのもとへかえります—

ちっぽけな・・・

憧れを消してくれるあなたは
どこに居るのでしょうか

もう近くまで来ているあなたは
・・・どんな人でしょう
あなたの愛が私を包んで
くれるものと信じたいのです

あなたのもとへ帰ります
・・・迎えにきて下さい
一人旅は疲れます

早くあなたの・・・
姿をみたいのです

第2章5

ーペットを吹けばいいー

トランペットを吹こう
明日の夢を呼び込むように

今のままでは
夢を呼ぶような
音じゃないけれど
いつかはきっと
音色が夢を運んでくれる

いつかはきっと
音色が幸福を運んでくれる
いつかはきっと
あこがれの人と出会うのです

第2章6

－愛よ未来へ行け－

一瞬のふれあいが
愛を求める事になるのだろうか
お互いの意識が
恋の始まりだろうか

何かを気付きあった頃から
他人行儀な
会話になるのだろうか

ふざけあったり
じゃれあったり
そんな子犬のような
たわむれの愛が
私の過去の中に
止まってしまっている
・・・そんな気がする
未来に向かって行って
ほしいのに・・・

第2章7

ー心の窓がブルーならー

空がグレーから

ブルーへかわるとき

私の心は和むだろうか

私の心は澄み切った色になるだろうか

私の心は今、曇っています

太陽よ顔を出して下さい

そして私に愛の光を下さい

決して雨にならないで下さい

心が晴れのときは雨でもいい

楽しい雨の歌を聞けそうだから

ざざぶりの雨もいい

あの勇壮なマーチを心で聞けるから

第2章8

－苦しめる憧れ－

少女への憧れがある私
そんな私は
まだまだ若いのだろうか
純真で素直な私の心は
まだまだ若いのだろうか

少女の行動に
心を痛める私は
まだまだ若いのだろうか
憧れの少女よ
私の心の中で
止まって下さい

大人の恋が出来ない少女よ
いつまでも清く
美しい瞳の少女よ
私のあこがれが
解るでしょうか

私を苦しませないで下さい
憧れの少女よ
微笑んで下さい
それだけで私は
うれしいのです・・・

第2章9

—本当にごめんなさい—

通りすぎた過去の中に
立ち止まって
あなたが話しかける
どうして私に
愛を下さらなかったのと

そのような妄想は
わたしの心を痛める
あのときの私は
全てにおいて
満足してたのだろう

あこがれの恋に酔い
あなたとお話ができるだけで
満足だったのだろう
ごめんなさい
あなたの気持ちが
わからない私でした

本当にごめんなさい
まだまだ大人でなかった私が
いけなかったのです
でもあなたは・・・

第2章10

－祈りたいときには－

部屋にはキャンドルの
ともしびが
大きな輪をつくる
暗いなりに
何かが誕生するように

外は・・・もう暗い
窓をあけると
ともしびが
大きくゆれる
僕の心のように

でもだんだん
もとにもどる
素晴らしい夜明けを
期待しながら

第2章 1.1

—おまじない—

あなたの顔を
思い浮かべてねよう
そうすりゃ
きっといい夢みられそう

「海辺で二人して歩く
手をつないで
走り出したぞ・・・
彼女も走る もうれつに
でも私は速く走れない

彼女はひき返して来て
笑顔で僕に手をさしのべる
二人は走るのを止め
肩をだきあって歩きだした」

第2章 12

—私のなかのあなた—

あなたは知らない
あなたは感じない
私のなかのあなたを
眼を閉じても
あなたがいる
いつも私のなかにいる

少しでも感じていますか
私の瞳のなかのあなたを
そっと私のなかを
のぞいて下さい
ほら・・・
あなたがいるでしょう

第2章13

－夢の国－

ひとりでこげないボート
でも私だけです
どうしょう
向こう岸へ渡りたいなあ・・・

向こう岸は未知の世界です
楽しいことがいっぱいありそう
悲しいこともあるかも
知れないけれど
何かいいことありそう
でも手が出ません

あなたが来ないと
何もできません
早く来て下さい
そして素晴らしいものを
見つけて下さい
ふたりだけの世界を
つくりたいのです

第2章14

ーお嫁さんー

唯一の話し相手

母であり

姉であり

妻であり

妹であり

恋人であり

欲を言えば

キャリアウーマン

・・・であってほしい

第2章 15

—贈りもの—

あなたは 何がいいですか
まだ あなたのほしいものが
わかりません
教えてください

私の気持ちを伝える
贈りものは・・・
私の宝物にしましょう
私の宝物・・・
それは私の心です

あなたにだけ あげたい
でも、もしいやなら
私の心にそっとしまってください

第2章16

—あなたの好きなレコードは—

あなたのレコードを
聞いてみたい
あなたのレコードをこの耳で
時間の経つのも忘れ
聞いてみたい

あなたの選んでくれた
レコードを聞いてみたい
あなたの好きな
レコードを聞いていると
あなたとお話してるみたい

私も聞いていますよと
叫びたくなります
きっと一日中
楽しいのにちがいありません
あなたの好きなレコードを
教えてください
どんなレコードでしょうか
きっとすてきな
すてきな音楽でしょうね

あなたに会って
教えてもらいます
私の希望どおりのレコードなら
幸せの歌がそこまで
聞こえてくるようです

第2章17

ーすべて大好きー

君の瞳

君の笑顔

君のすました顔

君の仕草

君が納得する顔

でも、一度は

素顔を見せて下さい

もっと大好きになるでしょう・・・

今のままで変わらないでほしい

君のすべてが大好きだから

第2章18

－私の天使は－

山がわた帽子をかぶる
冬はもう近い・・・
銀世界に一人おどり出よう
雪のしろさよ
よごれのない雪よ
まるであなたのようにだ

雪に顔を埋めて
あなたに キスをしよう
あなたを 思いながら・・・
あなたを 思いうかべて・・・
それで満足はしない
待つことだけではいけない
TELをしよう

会いたいなあ
お話しできなくたっていいんだ
あなたをみてるだけで楽しい
心がやすまる何かが
あなたのなかにあるのです
そう・・・あなたは天使です
私の天使よ・・・私に愛を下さい

第2章 19

一人恋しいときー

低い音で

クラシック音楽を

聞きながら詩を書く私

いつからだろうか

こんな事するのは

そろそろ適齢期に

なったのだろうか

愛とは何かと考えている

憧れを

心のなかで探している

夢のなかで未来の妻に

逢えると思っている

どこかで恋が芽生える

だろうと思っている

いつも恋という字から

頭が離れないでいる

どうしてだろう

人恋しい

季節だからだろうか

それとも・・・

誰かに恋を

しているのだろうか

第2章20

－別の顔の私－

別に楽しくもないのに
陽気にはしゃぐ私
もうひとつの私の顔
仕事のときも冗談がとぶ
できるだけ楽しく過ごすため
別の淋しい顔を
かくしてるのでしょうか

ひとりになったとき
何か一種の冷たさを持つ私
心に影を背負ってるような私
男って
ふたつの顔があるのでしょうか

淋しいくせに意気がって
そんなことは口には出さない
ポーカーフェイスのように

私の心を見抜く女性は誰だろう
私から愛を注ぎたくなる女性は
どんな人でしょう・・・

第2章21

－結婚行きの列車－

結婚行きの列車が出発する
お急ぎの方は早くして下さい
列車が出ますよ
そのとき私は
その光景に憧れをみつけた

恋人もいないのに
まだまだ列車にのれないのだと
新しい年がくれば
特別の結婚行きの列車が出るだろうか

私たちのために
二人だけの
列車が旅立つぞ・・・

そうだ
来年こそ
恋人とともに列車にのろう
特別急行列車で
先の列車を追い越そう

第2章22

－眠れないとき－

あなたは今
何を考えているのでしょうか
あなたは今
何をしているのでしょうか

いろんなところ歩いたので
ぐっすり眠って
いるのでしょうか

楽しい夢を
見ているのでしょうかね
今日はありがとう
眠ってしまうと
楽しい思い出が
なくなるのではと
考えてなかなか眠れません

この気持ちが
あなたの元へ届いてほしい

第2章23

－朝の夢－

朝日のなかを
なんの木でもいい
落ち葉がいっぱい
落ちている並木道を

コートのをりをたてて
ひとりで
歩いてみたい

いつか
ふたりで来るだろう
並木道を
今からひとりで
歩いてみたい

その軌跡をふりかえり
もうひとつの軌跡は
いつ出来るだろうか
・・・と考える

第2章24

－少女のなかの憧れ－

セーラー服のなかの
あなたは何処にいますか
もう大人になってしまったのですか

長い髪が似あう
あなたは何処にいますか
もう髪を切ってしまったのですか

長いスカートの
あなたは何処にいますか
もう短いスカートにしたのですか

昔の清純な
あなたは何処にいますか
もう社会の雑踏のなかで
汚されたのですか

今、あなたは何処にいますか
教えてください
少女のなかの憧れを
探している私に・・・

第2章25

－あなたを待つ時間－

あなたは
きっと来ると
思っているときの
待つ時間の楽しさ

あなたは
来ないかもと
思っているときの
待つ時間の淋しさ

私の思いやりが
あなたに
通じているときの
待つ時間は短い

たとえ何時間で
あろうとも
私のあなたは
きっと来てくれる

何時間でも待ちますと
心でつぶやいている
私です・・・

第2章26

－民話の世界へ行こう－

春が来ればれんげ畑でねころんで
本を読みたい
花の香りをおなかいっぱい吸って
民話を読んで
その世界で主人公になっている
夢を見れたらなあ・・・

「鉄の靴をはいて・・・

歩き続ける男・・・」

その靴がすり減ってしまった頃
ひとつのお城の前に来ていた
そこから物語が始まる・・・

男はお告げにより
お城の姫様に恋を抱く男になって
しまう
でも姫様には悪魔の霊がのり移って
いて死を待つだけである
男はその話を聞いて
悪魔の山へ行くために鉄の靴を二足
も用意し剣を持って出かけて行く

男が・・・悪魔を退治してかえって
くると姫様は元の美しい姫様になって
いて男のかえりを待っていたのです

2章27

ーさようならー

ガラス越しの
キスのあとに
あなたの笑顔が
浮かんできます
汽車は
何事もなかったように
走り続ける

もうあなたとは
会えないかも
しれないというのに
・・・行きずりの恋とは
たった一度の恋とは
なんて淋しいのだろうか

私の行く姿に
笑顔を見せて
励ましてくれたあなた・・・
心で泣いているあなたを
知っているだけに
私の心は暗い

・・・でも
笑顔には笑顔で
お別れしなくては
またどこかの世界で
会えるだろうことを信じます

第2章28

－少女への恋心－

美人じゃないけれど
かわいいあなた
ぼくの瞳はあなたを
とらえて離さない

パーマもしてはず
化粧もしてはず
素顔で純真なあなた

僕の心はあなたに
夢中なのです
僕の心のなかに
入って来て下さい

第2章29

－夢のなか－

恋・・・そんなもの
どこにあるのでしょうか
今
僕としては
妹がほしいのです

どういう訳なのか
わからない
すごく年下の女の子が
いいのです

天真らんまん
素直な女の子がいいなあ
という夢をみます
あなたも、あなたも
みんなで僕の妹を
探すのを手伝って下さい

第2章30

ーひきつける何かー

学生時代の服が似合う彼女
飾り気のない彼女
ちょっぴりかわいくて
何かをしてあげたい彼女

かといって何もできない僕です
もしお金が貯まって
休みも多くとれれば
二人してスイスの野原で
思いっきり走ってみたい

ねころんでのおしゃべりもいい
思いっきり甘えてくれてもいい
そんなこと考える
ある秋の一日です

第2章31

ー山の友へー

山へ登られていますか
春山、夏山、冬山
ピッケル片手に
りりしく歩く

あなたのうしろ姿に
夕日が映えて
赤いリュックが
消えてしまった

帰ってきてね
ただそれだけで
通じ合う山の友

登山ぐつの足音が
聞こえてくるのを
待っています

第2章32

－ほほえみを下さい－

あなたは
いくつなのでしょう
年齢も知らず
名前もわからない

ただひとつ
知っていること
それは私があなたに
愛を感じていることです

片想いでもいいのです
私のそばにいて
くれるだけで・・・
時々笑顔を
みせて下さい

それだけで
しあわせを感じます
生きているんだなあって
思います

第2章33

－二人だけのX'mas－

ピアノが弾けるなら
ピアノを買いましょう
あなたが弾いて下さい
私が唄います

あなたはハミングして下さい
二人だけの
X'masをしましょう
ギターが弾けるなら
ギターを買いましょう
あなたが弾いて下さい
私と唄いましょう

あなたの声はきれいですね
二人だけの
楽しいX'masです
夢があるのなら
夢を話して下さい
あなたの夢を

私は目を閉じて聞きます
すてきな夢ですね
二人だけの
初めてのX'masです

第2章34

—明日もいいことが—

明日はどんな娘と
会えるのかなあ
いつもの女の子は
居てるだろうか
昨日会った少女に
会えるだろうか

私を見たら
ほほえんで下さい
気持ちよく運転できます
明日はどんな娘と
会えるのかなあ

横断歩道で
止まってあげたとき
黙礼してくれた
少女に会えるだろうか

あなたが歩道を
渡るときは
きっと止まります
元気でね頑張って
明日はどんなことが
あるでしょう

気持ちのいい
心のふれあいは
私の心をいやしてくれます

いいことが
明日もあるだろうことを
思いながら

ハンドルをにぎる私です . . .

第2章35

ー春はいいなあー

春になればテーブルを
ベランダに出そう
椅子もベランダに出そう
テーブルには花をおき
春風に吹かれながらの
食事もいいだろうなあ

花の香り
デザートの甘い香りが
ほっぺを赤くする

春になれば
ベランダで絵をかこう
くわえタバコで
にぎる絵筆も
生きいきして来そうだ

絵の具の香りが
春の風を そよ風を
春の幸せを
運んでくるでしょう・・・
春は
愛の季節でしょうか

第3章1

－あなたの心のなかへ－

あなたの世界は
よく知っています
でもあなたの世界へ
・・・入っていきたい！

プライベートな
あなたの世界を
知りたいと思っでは
・・・駄目ですか

あなたの世界へ入っでは
いけないと思っでも
あなたの心のなかへ
足が動いてしまうのです

あなたの心のなかに
私をむかえて下さい

第3章2

－過去の恋－

腕組みしてよく歩いたっけ
恋人のように
静かな喫茶店の片隅で
大人の恋を語りあったっけ

春はそこまで来ているのに
まだ少し・・・寒い日々
口づけを許しあった仲なのに
あなたは今・・・
どうしているだろう

愛を確かめあった仲なのに
あなたは今・・・
どうしているだろう

過去の恋をふりえって
さよならをした・・・
あの日を思い出す

第3章3

－幻想の世界にいる－

賛美歌を聞きながら
もの想いにふけるのもいい
透きとおるような歌声が
部屋にひびきわたる

ひと足早いX'masのよう
部屋のあかりを消してみると
どこかの教会にいます

キャンプ用のローソクを
・・・たててみた
赤いローソクに白い炎が輝き
部屋のムードをかえてしまう

鏡に自分の顔を見たとき
そこには信じられない
・・・私がいた
私も神の子なのだろうか

第3章4

－夢であいましょうか－

夢のなかであえるでしょうか
夢であえたら楽しいですね
好きなことも言えそう
楽しいことも言えそう

・・・でも
あなたにふられるかも・・・
いいんです
夢ですから・・・
それでもやっぱり
すてきな夢のほうがいい

夢のなかでも
あなたが好きでしょうね
きっと・・・

第3章5

－手袋をあげます－

11月ともなれば
朝の空気は冷たい
自転車のあなたの手が
かわいそう

少し時間を下さい
暖かいものを作ります
あなたに気に入って
もらえるとうれしい

心をこめて編みます
大切にして下さい
わたしと違って

第3章6

—みんな友だち—

好きでない
あなたからのTEL
でも、うれしい・・・

一人の人間として
お話ししよう
そのうち好きになるかも知れない
きらいだと決めつけません

きらいと言うことは
その人をよく理解して
初めて言えることばですもの

ふれあいは大事にします
心のきれいな私でいたいから
みんな友だちですもの

第3章7

－ひとり暮らしのあなたへ－

部屋の模様替えの
好きなあなた
どんな部屋でしょうか

部屋はあなたの
心のひとつです
励まし、心をいやし
明日の活力源の
ひとつであってほしい

部屋の鍵を貸して下さい
何かお手伝いしたいのです
でもあなたの心を
乱したくありません

そっと・・・空気のごとく
通りすぎることにします

第3章8

－他人の眼－

18歳の女の子
美人じゃないけど
かわいい 女の子
瞳のきれいな
女の子

おすまし屋さんだけど
少しあわてん坊かな
オシャベリも 上手だっけ
歳をとると
やり手ばあさんになりそう

彼女って
頭いいんです
それに ガンバリ屋さん
元気で 勉強して下さい

化粧はしないでね
素顔がいいから・・・
手を握りたくなる
声をかけたくなる女の子

第3章9

－やっと気になるとき－

30になれな
恋人を見つけよう
ゆきずりの恋もいい
そろそろ その気になる

自分にいらだちを感じながら
川の流れに従う時がきたかと
想いをはせる

秋になれば
幸せがくるだろうか
結婚できるだろうかと

初秋の風が
なにかいい事を運んで
くる様な気がする

第3章10

－心をかえよう－

人の心に
溶け込もうとする僕に
じゃまがはいる
何だろう

一本の線が原因らしい
切っても
切っても また出てくる
僕の心を変えるしか
方法はないのだろうか

人の心を変えてしまう
何かがほしい
きっと見つけよう
その気になって

第3章 11

ーカムバックできる！ー

昔の愛をとりもどそう
一年半も凍りついたままの愛を
溶かすことができるだろうか
それだけのエネルギーが
私にあるだろうか
きっとあなたもそう思っている

現実に二人の愛は
確かなものだった
愛は不滅なのだと考えていた
でも心騒ぎを覚えながら
一種のとまどいを感じる今
新しい愛を求めようとする私に
何の反応もない昔の愛が
とつぜん速いテンポで
復活をみせようとしている

溶けた愛は素晴らしいものだろうか
あなたを幸福にできるのだろうか
新しい愛に希望をなくしたことで
昔の愛に没頭しようと
しているのではないのか

昔の愛にもう涙を流せないことを
知っているのか
昔の失恋のくやしきだけ
心に残りそうな気がする

第3章12

—あと5日で—

機械音のなかで
仕事をしていると
妙に心が落ち着く
考える要素が少ないためだろうか
機械のリズムがそうさせるのか

家に帰ると
いろいろ心が乱れる
試験勉強もしなくてはと
思ってもはかどらない

いつまでも20歳代でない
でも気持ちだけは若くもとう
体はまだまだ20歳代のつもりです
あと5日経てば30歳となる

第3章13

—秋の深まりに—

赤く映えた
野原を歩く
すすきが
小鳥たちが
秋の深まりを
教えてくれる

彼女の髪には
野菊の髪かざりが
似合っている
顔を赤く染めながら
歩くふたり

おとずれようとする
冬にむかって
愛を確かめるように
手を強く握りあう

第3章14

—私のなかにいるあなた—

私のなかにいる
あなたと
あなたのなかにいる
私と
恋をしましょう

あこがれを探しましょう
夢を見つけましょう
すごく幸福になれる
鳥を探しましょう
楽しい思い出を
つくりましょう

第3章 15

－これが恋なのですか－

あなたの顔が
まぶしい
じっとみつめておれない
お話しも出来ない
悪ふざけも出来ない
冗談も言えないのです

あなたは感じてるでしょうか
私の気持ちを・・・
あなたに
見つめられると
心まで赤く染まりそうです

第3章16

－語り会おう－

きのきいた喫茶店で
ホットコーヒーを
口にしながら
語り合うのもいい

時間が経つのを
気にしない
そんな語らいも
久し振りにしてみたい

夢を語り合おう
恋を語り合おう
昔を語り合おう
今を語り合おう
明日を語り合おう

静かな音楽を聞きながら
外の景色を
みているだけでもいい

第3章17

－星の国から－

君のことは
心の中で生き続けても
すがた、かたちは
永遠に帰っては来ない
愛をかたちで
表現したい想いが
だんだん強まってしまふ

君の身代わりを
求めてはいけないのだろうか
せめて後悔しないために
一夜の愛でも
君と思って
愛さなければならぬだろう

神に召された
君のためにも・・・
いつの日か君が姿を変えて
僕の前に
現れることを信じている
その女性は
どこの星から来るのだろうか

第3章18

－電撃結婚をしたい－

あなたの心が
きれいなら
今すぐ
結婚式をあげよう

何も出来なくたって
いいんです
私に好意があるなら
今すぐ
結婚式をあげよう

あとのことは
どうにかなるでしょう
愛を
二人で温めよう

第3章19

－愛をおみやげに－

二人の愛を
いっぱいつめこんで
故郷へ
持って行きましょう

愛は荷物に
ならないでしょう
この愛を
おみやげにしませんか

二人がこんなに
愛し合ってるのを
父や母に
みんなに
みせてあげましょう

幸福いっぱいの
私たちだもの
何よりの
おみやげと思いませんか

第3章20

－愛の旅路－

これから長い旅路が
始まるのです
あなたは
車に乗っていなさい
私が後ろから
押してあげましょう

私が疲れたら
ときどき交代して下さい
助け合って
楽しい旅路にしましょう

苦しいときは
励ましあいましょう
喧嘩もいいですね
でもほどほどにしましょう

二人で
どんなことでも
話し合いましょう
愛の旅路は長いのですから

第3章21

－愛の始まりでしょうか－

あなたに出会うと
胸のときめきを
おぼえます
恋の芽生えでしょうか
それとも
愛の始まりでしょうか

あなたに会うと
心がさわやかに
なるのを感じます
あなたに
あこがれて
いるのでしょうか
それとも
愛の始まりでしょうか

第3章22

ー心のなかを散歩しましょうー

あなたの心のなかを
散歩してみましょ
う
あなたに
気付かれぬように・・・

でも
気付かれてもいいのです
あなたが好きな私ですから
きれいな空気ですね
空もすみきっていますよ

お花畑のいい香り・・・
塵ひとつ落ちてません
あなたの心は
素晴らしいですね

私でよかったら
散歩のお相手をして
いろいろ教えて下さい
あなたの心のように
なりたいのです

第3章23

－死んでみたら！－

死

死とは

清らかな心で死ねたら

天国できっとあなたと

幸福になれるでしょう

この世では

心が結ばれない何かがある

死ねたら幸福になれるそうです

私が天国で待っています

きっと来て下さい

二人で天国の

川辺を歩きましょう

純粋なロマンチストは

死ねるだろうか

心では

感じていながら

遠ざかっている恋

死ねたらいいのになあ

そうすれば

かわいいあなたを

天国から暖かく

包めるかも知れない

いつもふれあって

いられるかも知れない

第3章24

－愛を感じて下さい－

きっとあなたは
どこかで私の愛を
感じるでしょう

遠くに離れていても
あなたの心は
私の心で
包まれているのです
きつときつと
幸福になれる心で
包まれているのです

きっとあなたは
どこかで私の夢を
見るでしょう

遠くに離れていても
あなたの夢は
私の夢で
包まれているのです
きつときつと
幸福になれる夢で
包まれているのです

第3章25

－飛行機にハートをのせて－

想いを

手製の飛行機に託して

思い切り飛ばそう

腕の折れる程の力で・・・

飛んだ距離が長い程

あなたが好きです

滞空時間の長い程

あなたを愛しています

飛行機が見えなく

なったとしたら・・・

それは

想いが通じたのです

その飛行機は

あなたの元へ

届いていることでしょう

第3章26

ー二人で飲もうよー

焼きマツタケで
一杯飲もうか

じゃあ行きます
お酌を気軽に
してくれるあなた
でも恋人じゃない
男友達のようなあなた
でも酒は飲めないのです

料理は上手くなくたって
いいんです
湿っぽい話
ゲラゲラ笑いこける話
政治の話
学校の話
恋についての話
何でもいいんです

そうだね
これはどうだっけと
言いながら酒を飲める
一日がほしい
あなたも少しは
酒が飲めた方がいいなあ
やっぱり・・・

第3章27

—あなたは妹—

気を使わないで
悲しくなるから
でもやさしさは欲しい
あなたの笑顔でいいのです
ちょっぴり笑って下さい

すました顔をしないで
悲しくなるから
でもやさしさは欲しい
あなたの言葉でいいのです
ちょっぴり話して下さい

恋人にはならないで
悲しくなるから
でもやさしさは欲しい
あなたは妹のようでいいのです
ちょっぴり甘えて下さい

第3章28

—あなたにさよならしたら—

あなたに
さよならしたら
私の心はあの青い空に
消えてゆきます

あなたに
さよならしたら
再びかえっては来ない
あなたへの想いが
宇宙に広がって
あなたを暖かく
包んでしまうのです

あなたに
さよならする時は
手に一杯の
楽しい思い出を
作ってからにします

さよならは
私からあなたへの
最後の贈り物です
だからあなたに
さよならするのです

第3章29

ーぼくを追いこさないでー

静かな町で
夕日の落ちる町で
彼女がやってくる
うしろからやってくる

僕には気付かずに
やってくる
でも気付いて下さい
そして僕を追い越すのは
やめて下さい

僕のうしろで
ビックリさせて下さい
僕と一緒に歩いて下さい
できれば腕を組んで
笑顔をみせながら
語らいも楽しく

第3章30

－信じること－

あなたを待つ
陽気に・・・
期待と不安が
交錯する心をよそに・・・
読む本の数が
増えるにつれ心配になる

でも
あなたのことですもの
きっと来てくれる

本にいらだちを
あずけて待つ私
でも信じることって
いいなあと思う
あなたの
ごめんなさいの声で

第3章31

—心の電話—

私の心には
あなたの電話があります
あなたの電話のベルが
私の心で鳴っています

早く早く出て下さいって
あなたの心が
私に伝わって来ます
今日は機嫌がいいんですね

おすまし屋のあなたから
心の電話をもらうなんて
また電話のベルを
聞かして下さい
楽しみにしていますから

あなたのカワイイ
きれいな心なら
大歓迎です
いつも電話のベルに
注意してますよ

時々他のベルも
鳴りますけど・・・
今日はうれしくて
電話にキスした私です

第3章32

—いつもの通りかな—

彼女にふられても
何もなかった顔をして
口笛を吹きながら歩こう
人に泣きをみせない
私だと思いたい

心で泣き顔で笑い
そして陽気にふるまおう
苦しい胸のうちは
誰にでもあるさ
もっと強くならなければ
明日笑いたければ
今日苦しめ

・・・あなたに
宣戦を布告する
覚悟しときなさい
恋のとりこにしてやるから
ニヤロメ
なんちゃって
またまた
ふられるかな・・・

第3章33

ー心はしけもようー

心の荒波に
のまれそうな私
助けて下さい
小さな小さなヨットでは
沈没しそうです

あなたの大きな船で
助けにきてください
沈没してからでは
遅いのです

あなたに
その気があるのなら
いそいで来て下さい

もう一度
SOSを出します
あなたは・・・

第3章34

—瞳を閉じれば—

会えない
淋しさでしょう
瞳を閉じれば
あなたの笑顔が
浮かんできます

あなたとともに
過ごした日々が
通り過ぎてゆきます
楽しい思い出だけが
心にとまってしまう

夢中になっては
いけないのに
なぜかあなたが
忘れられない
冬になってしまった

春には別の愛を
求めようとしているのに
瞳を閉じれば
いつもあなたが
話しかけてくる

第4章1

－愛を探して－

僕の思っている愛が
見つからない
見つかっても
すぐに逃げてしまう

星の数ほど
素敵な女性がいるのに・・・
でも探している愛は
夢みるあなた
・・・ひとりですもの

簡単には見つからないと思う
世界でひとつしかない愛を
探し続けるのも
いいと思っている

第4章2

ーよろいをもとうー

スポーツをして
健康を守るよろい
学習をして資格をとり
生活を守るよろい

彼女達との・・・
心からの会話を深め
将来妻となるべき人を守る
結婚というよろい

仕事をバリバリして
会社のためでなく
自分のために働き・・・
信頼をうけるという
見えないよろい

友との語らいにより
友情を深め
お互いの男の世界を
守るよろい・・・

これだけのよろいは
必要だろうかあ・・・
残るは何だろうか！

第4章3

－失意でも希望が－

雨に打たれて
暗がりの道を・・・
ひとり歩いている

走れば早く家に着くのに
走る力も出ない
失意から抜け出そうと
思いながら・・・
声を出しても
遠くへは届かない

家路を
雨に打たれて
帰ってゆくあなたよ
家には勇気を
起こすものもないのか

慰めてくれるものもないのか
ほら・・・家に灯りが
ともっているではないか
元気出せよ

第4章4

－霧のなかのあなた－

霧のなかの街に

あなたは住んでいるのですか

私はあなたの家がわからない

私からもよく見える街に

住めないのでしょうか

なぜあなたは

霧のなかの街に・・・

住んでいるのでしょうか

孤独でいたいのでしょうか

それとも私にとって

まぼろしの・・・

あなたなののでしょうか

第4章5

—どこか遠くの街へ—

どこか遠くの街へ
リュックを背負って
行ってみたい

見知らぬ
あなたに会って
お話もしてみたい
遠くの街の
川の流れも
山の草木も
違った会話をくれるでしょう

どこか遠くの街へ
自転車に乗って行ってみたい
遠くの街の
空気をお腹いっぱい吸ってみたい
海鳴りも 空の雲も
私の心を知ってくれるでしょう

第4章6

－恋とはちがうなにか－

少女への憧れがたち切れない私に
大人の恋ができるだろうか
あなたは・・・
もう少女でないかもしれない

でも妹のような
チョッピリお茶目でおすまし屋さんの
瞳のきれいな・・・あなた
大人の恋をしたいと思いませんか

妹がいない私の恋とはちがう
なにか・・・
もうひとつのロマンでしょうか

恋とは思いたくないのに
心さわぎがするのは
・・・なぜだろう

第4章7

－初恋のあじ－

塩田跡に咲いた花
かわいい花びらが
風にふかれて楽しそう

今、笑ってるの・・・
左右に大きく
うなずいている一輪の花

そっと口づけすると
甘いみつが私の唇に
運ばれてくる

初恋の味のように
初めて口づけした・・・
あの日を思い出してしまう

第4章8

－恋人とおもっています－

あなたの写真を
定期入れに入れてみる
いつもあなたと
行動できるうれしさ

大事にします
私の胸のポケットに
入れておきます
仕事の時も食事の時も
遊んでいる時も

いつもあなたといっしょ
この楽しさ・・・大事にします
私の恋人とおもって

第4章9

ー私とあなたの雲よー

草むらに腰をおろし
雲をみつめていると
あなたによく似た顔に見える

子供らの歓声を
遠くに聞きながら
草むらに体を
あずけてしまった私

もうひとつの雲が私の顔に
似ていることを期待する心を
どうすることも出来ない

雲に願いを託す自分に
太陽がまぶしく照りつける

第4章10

－ひとつのきっかけから－

ひとつのきっかけが
あなたとの橋渡しを
してくれるかも知れません

ふたつめのきっかけが
あなたとの恋の橋渡しを
してくれるかも知れません

みつつめのきっかけが
あなたとの結婚の橋渡しを
してくれるかも知れません

よつつめのきっかけが
あなたとの永遠の愛を
つくるかも知れません

ひとつのきっかけが
私たちの愛への
扉かも知れません

第4章 1.1

—あのときのあなたへ—

20歳の誕生日おめでとう
そういつて腕時計を
贈った私・・・
大切にしているでしょうか

あなたのかわいい腕に
私の心の歌を
コツコツと刻むでしょうか
ときには思い出してほしい
たまにはお手紙を下さい

なぜか淋しい・・・
心に風が吹き抜けるような
そんな感じがするのです
今までの私と
違った何かに気付くのです

第4章 12

－19歳のあなたは・・・－

まだ19歳のあなたは
子供なのですか
好きな人と
お話ししてるところ
なんかをみると
女だなあと
思うときもある

小さなかわいらしい
あなたの顔を
両手ではさんで
そのぬくもりを
私の手に伝えてみると

あなたの
いたずらっぽい眼差しが
私の心をゆさぶる
目をとじてごらん・・・

第4章13

—大人の恋—

大人の恋とはどんな恋だろう
学生気分の抜けない
私にはわかりません
なんかかやと勉強していると
大人の恋は出来ないのだろうか

今までの恋は
大人の恋ではなかったのだろうか
愛していると言えない
好きですと言えない
そんな恋は
大人の恋ではないのでしょうか

態度で示す恋
時には陽気に
時にはおとなしく
余りしゃべらない恋
夢を追いかける憧れの恋は
大人の恋ではないのでしょうか

それともあなたは
気付いていないのでしょうか
少しは私に愛を下さい

第4章14

－眠りなさい－

眠りなさい
私の胸に抱かれて
私の鼓動が
子守歌になるでしょう

愛しいあなたよ
すてきな夢を
プレゼントするわ
空を飛ぶ私が
みえるでしょう
私が迎にゆくわ

それまで
そっと待ってなさい
ひとときのやすらぎを
あなたにあげるわ・・・
だから・・・
G o o d n i g h t

第4章15

ー本当はすごく会いたいー

会社がちがいますもの
毎日会うのは無理ですね
せめて
月に一回は会いたい
あとは、TELでもかけて下さい

体があいている私なのに
いつも会える私なのに
あなたにつれない私
ごめんなさいしか言えない私
あなたに会うと好きになりそうで
恐いのです

でも会いたい気がする私
秋の深まりに心痛める様です
淋しさを音楽に
すり替えている自分に気付くのです

第4章16

－聞き役もいい－

背中をあわそう
そして歩こう
ふり返らないで下さい

あなたが見えなくなるまで
背中をあわそう
こんな気持ちにさせる
あなたが嫌い

前に向き合っていると
何時間でも
お話しできるようなあなた

私は頼杖をして
聞くだけでいいのです
いろいろな事を
話して下さい

第4章17

－思い出の箱－

いつの日か
思い出の箱をあけて
昔にかえる

箱の中へ入って行って
一日中出てこなくても
いいような
楽しい昔をつくろう

箱にはカギをかけません
いつも出入りするものですから
カギをかけたら
私は死んでしまいます

カラッポの箱は
あなたの思い出に
とっておきます・・・

第4章18

－若い力－

生きかえる

若い力

飢えているときのような眼で

目的に向かって行く

馬車馬のように

突っ走れ

私の目的へ

空は青いし

海は穏やかだ・・・

そんな変化のない所は止めよう

苦しみあえいで

食べ物にありついた

喜びを知っているでしょう

あの感じで

目的に向かって行け

きときと

よかったなあと

思えるさ

第4章19

—もう卒業ですか—

あなたの匂いが
残る部屋で
帰って行ったばかりの
あなたのことを考える

ほのぼのとした
香りのなかに
我を忘れ

あなたの言葉を
ひとつひとつ
思い出しながら
明日の彼女は
どう変わっているだろうと
考える

彼女も一丁前に
なれるところまで
来たんだなあ

そんな彼女を
まぶしく
思う私なのです

第4章20

—あなたの写真をみれば—

あなたの写真をみれば
思い出す
ありふれた恋も出来ず
はしゃぎまわっただけの
子どもじみた恋ごっこを

あなたの写真をみれば
思い出す
ただ好きだというだけで
おしゃべりしただけの
楽しい青春時代を

あなたの写真をみれば
思い出す
ただの友だちの様な気持ちで
レコード音楽を聞いただけの
さわやかな
ふれあいの日々を

第4章21

ー泣かせないで下さいー

泣いているんじゃない
煙草の煙が

目にしみるだけ
泣いているんじゃない
目にゴミが入っただけ

泣くのは愛する人が
死んだときだけ
泣くのは好きな人と
別れるときだけ

泣くことの少ない私
好きなあなたへ
私を
泣かせないで下さい

愛するあなたへ
私を
泣かせないで下さい
弱い私ですから

第4章22

—だまって帰っちゃおうかな—

だまって帰っちゃおうかな
あなたの
来るのを待って
帰ろうかな

さようならを言うために
あなたの
うしろ姿をみるために
あなたの
着ている服をみるために

だまって帰っちゃおうかな
あなたが
自転車で来るのを待って
帰ろうかな

何かを一言いうために
ペダルを踏んでる
あなたをみるために
髪をなびかせて
走るところをみるために

第4章23

—妹へ—

妹よ
お前は今
何をしてるだろう
好きな人とデートを
してるのだろうか

ただ付き合ってる
だけだろうか
数多くの男の人と
付き合って
男を見る眼を
養って下さい

18歳の妹よ
兄がいることを
忘れないでほしい
暇なときは
TELして下さい
どこかへ
行きましょう

第4章24

－街の灯－

街を照らす灯が
淋しくみえるときは
心がきれいな
ときなのですか

街を照らす灯が
賑やかにみえるときは
心が変わりやすい
ときなのですか

街を照らす灯が
消えて見えるときは
心が休んでいる
ときなのですか

街の灯を
見ていれば
私の心もわかります
どんな心かわかります

そんな人も
いるのでしょうか

第4章25

－別れの手紙－

便せんをぬらしません
悲しみに打ち勝ちます
お別れの手紙よ
こんな別れ方は
したくないでしょう

あなたとの思い出だけは
私の心のなかで・・・
星のあかりのように
きれいな光で残っています

手紙は燃やしません
新しいあなたに
会えるまでは・・・

愛はこれから
始まるのですから
涙は明日への出発です

4章26

－孤独の終わり－

自然と友達だった
一日も終わるのか
太陽との語らいも
星との語らいも
月との語らいも

あなたが
あらわれたことによって
消えるでしょうか
ただ孤独のなかに
ちよっぴり顔を出した
あなたなのかも知れない

ほんの短い付き合いの
あなたかも知れません・・・
でも私の心のあかりを
もっともっと
明るくしてくれる
あなたであると
思いたいのです

第4章27

－いっぱいのお愛－

この小さい胸に
愛をいっぱい
つめこんで
あなたのもとへ
出かけます

私の愛をからっぽに
してくれるあなた
帰りには
この小さい胸が
あなたの愛で
いっぱいになるでしょう

私の胸が
パンクしちゃったら
かわいそうだと言って
おでこにキスして
くれるでしょうか
想うだけで
胸がいっぱいです

やさしいあなたよ
ありがとう
きれいな心の
あなたに感謝します

第4章28

－春は夢のよう－

春の日差しは
やわらかくて
風のなかになると
穏やかな暖かさを
伝えてくれる

それは暖炉のそばで
居るようで心地よく
恋人の膝枕で
眠っているような気がする

春の日差しは
甘い夢を
運んでくれる

草むらに横たわり
腕枕をして空を仰げば
春のほのぼのとした香りが
聞こえてきて
髪を洗ったばかりの君を
抱きしめていた

第4章29

—いつも二人で—

今朝の目覚めは
太陽と特別な輝きで始まる
玄関の扉を開けると
一面の雪景色

一人で足跡をつけるのは
大変惜しい気がして
君と同じ大きさの靴を探して
二人分の足跡をつけてみる

少し離れて
その足跡を振り返り
いつも君と一緒に
歩いてみたい気がした

第4章30

－小さな世界－

そろいのセーターを
着て歩けるかな
楽しい二人に
見られるだろうか

腕組みして
いろんな所へ行き
・・・ショッピング
するのもいい

あなたの手料理を
たまに食べるのも楽しい
二人でいれば
何をしても楽しい
何を食べても美味しい

こんな小さな
二人の世界でも
私たちにとっては
夢のような国なのです
二人だけの世界なのです

第4章31

—憧れの君—

あなたの声がする
憧れの声がする
じっと聞きいると
なぜか聞こえてこない

僕の愛が
足りないのだろうか
でもいいのです
あなたの声が
聞こえなくても
心なら聞こえるから

少しでもいい
あなたの瞳を
みせて下さい
大きな瞳に
僕の顔が
映るだけでいいのです

第4章32

—いつかある日—

いつかある日

好きな人が出来たら

どうしょう

好きな人とめぐり逢えたら

どうしょう

どんな事を

話し合うのでしょうか

どんな所へ

行くのでしょうか

どんな人なのでしょうか

もう決まって

いるのでしょうか

神さま教えて下さい

きっと

やさしい人ですよ

きっと

すてきな人ですよ

きっと

心のきれいな人ですよ

すなおな私で

待っていますから

そっと

私に教えて下さい

第4章33

－虚勢とは－

ただ今
何も返事がない
一人きりだもの
いろいろな人形が
出迎えてくれるだけ

でも一人きりも楽しい
民話の世界というか
空想の世界というか
何かもの想いにふける
要素があるのです

ただ今
はい
お帰りなさい
空想の
妻の声も妻の顔も
全て満足させてくれる

第4章34

ー行動が気がかー

p. m 8. 30

あの娘は

今・・・何してる！

レース編み

TVをみてる・・・

読書中

彼氏とTELかな

勉強中

風呂のなか

友人とおしゃべり中

みかんを食べている

ケーキをつまんでる

電車のなか

・・・残業ですか！

バスのなか

大あくびをしてるかな

俺のこと考えて

ないよね・・・

第4章35

—さえぎるもの—

俺の行く手を
さえぎるものは何か
今の不安定な心か
ひとりの世界に
閉じこもっている
自分なのだろうか

昔から
妹のようなあいつに
一種の憧れをもつ
気持ちなのか

冷静に自分の性格を
分析しかねている
とまどいが続くと
心淋しさを覚える

X'm a s も近いのに
1年も終わろうとしているのに
立春がくれば
ひとつのけじめをつけよう

第4章36

－問いかけてみる－

こたつのなかで
足がふれあうだけで
お互いの愛を
たしかめることも
できるでしょう

そんな心のつながりが
大切なのです
あなたと私の
うそのない心が
大切なではありませんか

理性を殺す
必要もないでしょう
ただ心のなかを
きれいにしたい気持ちが
愛をはぐくむもの
なのでしょうか

きれいな体が
処女なのでしょうか

第4章37

ーピクニックへ行こうー

橋があって
川幅も小さくなっている川
まわりにはところどころに
花が咲いている

川辺にはトンボや
蝶ちょがゆきかう
そんなところへ
ピクニックへ行こう

魚釣りもいい
のんびりと
二人で語らうのもいい
野球のグラブをもってゆき
キャッチボールもいい
こんな一日がほしい

手作りのおむすびを
食べながらしゃべるのも
あなたが居ればの話です
春にはきっと行きましょう

第4章38

—あなたを感じる—

電気毛布のぬくもりに
あなたを感じながら
目覚める朝

遅い春に
終止符を打てるような
希望に胸が躍ります

流れる音楽も
あなたの心模様でしょうか
いつも口ずさむ
あなたの口笛が
美しく語りかけます

今日会えるあなたに
私の心が
鳴りひびくでしょうか
幸せの鐘が
聞こえてきます

第4章39

ー心のなかで止まって下さいー

心のなかを
走り去るあなたよ
私のなかで
ゆっくりして下さい

遊んでいきませんか
元へかえってゆっくりと
止まったり、
歩いたりして下さい
一回だけでは
私の心のなかは
わかりませんよ

ナイーブな
私ですから・・・
そんなに
いそがなくても
いいのではありませんか

あなたは
若いのだから
もっともっと
多くのふれあいを
求めなくては・・・

私の心のなかで
止まってみて下さい

第4章40

—とまどい—

私から逃げないで下さい
追っかけたりしません
何もしません
ただひとつ
あなたの心を
とらえたいのです

私から逃げないで下さい
いたづらをしません
何もしません
あなたの瞳を
とらえたいのです

私の心のなかを
のぞいてみて下さい
この清らかさを

第4章 4.1

－気持ちを伝えて下さい－

恋の悩みに耐えかねて・・・
一人酒を飲むすべを知らず
ただ声が聞けるだけで
何かの安らぎがありそうな・・・
そんな気がする私です

耐える気持ちを何かに託したい
そんな気持ちの解るあなたは
遠い国、星の国
ここまで帰っては来てくれない

星の流れに気持ちをのせて
あの娘の住んでる
街へ運んでおくれ
あの娘の心に伝えておくれ

第4章42

－素直さを出そう－

素直な気持ちを言えば

あなたは

分かってくれるかしら

本当の心を言えば

あなたは

分かってくれるかしら

わたしはあなたに無理を

言ってるのかしら

私の心の疼きを

分かってほしい

純粋な気持ちを

分かってほしい

待っています

分かってくれるまで

きっと分かってくれと

信じています

心の糸が

結ばれたと思いながら

私の心が

伝わってると思いながら

第4章43

ーエンジン全開だー

結婚という

大きな野原を走ろう

アクセルをいっぱい踏んで

走りまわろう

ガソリンの切れるまで

私という車がつぶれるまで

でも時には休憩しよう

車がなければ

目的地まで行けません

魔法の車ではないのですから

あくまでドライブテクニックを

駆使して慎重に走ろう

邪魔ものがあれば

車を止め、どかしてから走ろう

あなたの標識は

どこにあるのでしょうか

私にだけに見えるように

しておいて下さい

あなたの元へ

早く行きたいものですから

第4章44

ーペンネーム飛鳥圭についてー

飛ぶ鳥のごとく
自由に羽ばたき
未知の空へ
飛んでゆく

そして
母なる大地から
生活が始まる

大地は
土の積み重ねであろうか
しっかりと
大地を踏みしめて
我は大地に立つ
この二つの足で・・・

第5章1

—夢を追って—

夢を追っている僕
いつまでも
いつまでも・・・

あなたと共に
歩んでく夢を
あなたと共に
楽しく語らう夢を

あなたと共に
汗を流す夢を
あなたと愛しあう夢を

いつまでも
いつまでも・・・
夢を追ってく
まだ見ぬあなたを求めて

第5章2

－僕だけに感じるのか－

街のなかで
見知らぬあなたと
ほのぼのとした
何かを感じるとき
心のふれあい起きたように思う

それは僕だけなのか
心のふれあい・・・
次の日も逢えたとき
何かを望むのは僕だけなのか

ちっぽけな希望を
すてずにいるのは僕だけなのか

第5章3

－愛するあなた－

今日愛するあなたを
明日愛するだろうあなたを・・・
昨日は愛していなかったあなたに
元気ですか・・・

さようならはいいません
別れの言葉はですから
じゃー明日ねがいいですね・・・
私の胸もふくらみます

きれいな真心にふれて・・・
待っていてよかった
愛をくれたあなた
ありがとう・・・

第5章4

－明日がある－

結婚が駆け足でやってきて
俺をさらっていきそうだ
負けるものか
俺の愛したい人が
あらわれるまで
負けるものか

今の淋しさに流されそうな
そんな俺に向かって叫ぶ
でも少し弱弱しい
いつもの俺にかえろう

さあー
明日があるじゃないか
ラケットを握ってみよう
ボールを蹴ってみよう
女の子との雑談も
いいじゃないか

第5章5

－ちょっと不安－

女の子は男からの誘いを
待つだけでいいのだろうか
そんな女性はあるだろうか

純真でおとなしくて
やさしく・・・
母性愛の強い女性は
日本的でいい

シンの通った
何かをしようという
気構えのある女性は
好きになれそう
でも相手は俺を・・・

第5章6

—あなたのもとへ—

田舎へでも土地が
買えたら買っておこう
太陽の光が
部屋中に照りわたるような
小さい家を建ててみたい

何もなくなってもいい
俺の土地なんだ
ねころがって本を
読むのもいいな

テントをもって来て
そこで過ごしてみるのも
いいかも知れない
都会の雑踏をのがれ
一人の一日をもつのも
何か希望が湧いてくる

幸せを小鳥が
運んでくるよう・・・
羽根があれば
あなたのもとへ
飛んで行くのに

第5章7

－幸せと悲しみと－

私のとなりの幸せさん
私のとなりの悲しみさん
幸せを通りこすことの
ないように
いつも幸せさんと
手をつないで
いれるようにしたい

でも時には悲しみさんと
手をつないで
暗いところへ行くのもいい
幸せも、悲しみも
同じにやってくることは
めったにないでしょう

あったかいところ
ばかりだと
風邪もひきます
寒いきびしさも
必要でしょうから

第5章8

ーバスストップでー

バスを待つ・・・
あなたも
この時間にくるでしょうか
あなたの時間にあわせて
バスを待つ
心のときめき

バスを待つ・・・
あなたの笑顔が
みられるでしょうか
あなたの時間にあわせて
バスを待つ

だんだんと
心の高鳴りが
大きくなってくる

第5章9

—俺は男だ—

俺は男だと
意気込んでも
好きだと言えない
女性もいる

街角で見かける
ある女性に
笑顔のかわいい
あの女性に
会えるだけで・・・
心がさわぐ

片想いの恋もいい
これが恋なのかと
これをさかなに
一人飲む酒・・・

よくぞ男に
生まれけり
かわいい女性よ
恋をしましょう

第5章10

—ある夏の日—

浴衣で身を包み
下駄を鳴らして
歩くのもいい
夏の風が胸元にそよぎ
腰にさした
うちわがいいや

季節の風情を
味わいながら
街を歩く

盆踊りの歌声を
遠くに聞きながら
長椅子に腰をおろして
スイカなどを
食べてみたくなる
ある夏の日に・・・

第5章 1 1

—秋の風は—

秋の風に吹かれると
なんとなく淋しい気がする
この風は恋の風
この風はふる里の風

風があなたへの
想いを伝えるから
心が痛むのでしょうか
秋の風は嫌な風
でもまろやかなのです

冬になれば
コートになって
あなたを包みましょう

第5章12

—冬にさようなら—

冬にさようならしたら
まだ冷たさが
心に残る

冬の忘れ物を
探している姿がみえるから
冬の愛を探している私がいるから

冬にさようならは
まだ早い
暖炉においた恋は
静かに静かに
眠っているのです

春に目を覚ますのを
待っているのでしょう
冬にさようならは
まだ早いのです

第5章13

－起きて下さい－

あなたの心の中で
眠っている私
いつ起きるのですか

あなたの声にも
なかなか起きません
好きですを
言わないと起きないのです

すねている私
甘えている私
おこりん坊の私なのです
上手に起こして下さい・・・

第5章14

—私のお城—

私の全てを素直に出せるときは
愛を感じるあなたではなかった
愛を感じるあなたであれば
なぜ全てを出せないのか

二人きりならいいのです
でもまわりに気を使う
私はダメですね

私のお城へ来て下さい
これが私の全てです
私の話し相手に
なって下さい

私のお城を
おとぎの国のお城に
してみたいのです

第5章 15

—失恋なのか—

積極的に

身をふるい起こしてゆけば

実ったかも知れない

心のどこかで

あきらめとじれているものが

あったのだろう

告白ということは

こんなにもむずかしいものなのか

結果のみじめさを考え

何も言えないときには

恋愛というものに敗れたのだろう

恋に勝つためには

自分に勝たなければ・・・

誠意を尽くしても実らぬ恋なら

相手の見る眼が

なかったのだろうと思えばいい

今日の恋は完敗でした

でも悲しみは沸いて来ない

俺よりもいい人と結婚しろよ

そうでなければ悲しくなるから

悔いのない結婚をしろよ・・・

5章16

—汽車の来ない線路—

汽車の来ない線路を
口笛を吹きながら
歩いてみたい
淋しさを空に向けながら

汽車の来ない線路を
マラソン姿で走ってみたい
イヤことを忘れるように

汽車の来ない線路を
あなたと手を取りあって
歩いてみたい
恋人同士のように
明るく笑いながら

汽車の来ない線路を
歩き続けて行こう
時間の経つのを忘れて

きっと何かがある
きっと明るい
未来があるだろう

第5章17

－愛するあなたなのに－

私のともしびに
なってくれる
あなたでしょうか

私とひとつの心に
なってくれる
あなたでしょうか

私に従ってくれる
あなたでしょうか
私を満足させてくれる
あなたでしょうか

私のともしびになる
あなたよ
私の心がわかりますか

遊び方も知らず
世間も知らず
こんな私ですが
誰にも負けない
愛だけは
持っているつもりです

きっと幸せにします
愛して愛して
愛しぬきます
だから私の愛を
感じて下さい

私の愛におはようと
声をかけて下さい

私の愛を受けて下さい

5章18

－夢でないように－

さようならの汽車は出る
あなたのえくぼが
大きくなり、手がふられている
車内の雑踏に声も聞けず
あなたの動きが話しかける

元気でいて下さいね
再会を楽しみにしていますと
涙でぬらすことを知らない
心の強いあなたですもの

でも・・・
私の去ったあと
涙を流すであろう、あなたに
もっと時間をとって
楽しませてあげたかった

二人だけの短い一日が
過ぎてゆく・・・
今日の一日が夢のように・・・

第5章19

－服をあげよう－

私の気にいった服を
着てみて下さい・・・
そこにわたしの顔がある
あなたの顔がある

あなたを
包んでしまったような
よろこびがあるのです

私の気にいった
服をあげましょう
その服を着て
街を歩いて下さい

私はいつも
あなたと一緒にいる
よろこびがあるのです

第5章20

－なぜだろう－

過去にあともどりして
恋をする
自己主張も・・・
ためらいもなく出来る

愛の告白も出来る
ラブレターも書ける
もっといいことは
心が通じ合うって
ことなのです

過去に
あともどりしている私に
もうひとつの
今の私がいる
なぜだろうか・・・！

第5章21

—あなたのぬくもり—

あなたのぬくもりを
伝えて下さい
この手のひらに
この唇に

遠くにいるなら
大きな大きな
ぬくもりを
冷めないように
送ってください

近くにいるなら
今すぐ会いましょう
あなたのぬくもりを
伝えて下さい

第5章22

—虹が出れば—

雨がふれば
大きな雨がふれば
晴れたときの
虹で愛を運びましょう

あなたのところへも
虹の橋が
かかっているでしょうから
しっかりと
虹を見て下さい

近くまでいったら
迎えに来て下さい
あなたの胸に
リュックをつけて
そっとしまってください

Rev. 123 第5章23

－写真ができたら－

まもなく
写真が出来る
ラララ・・・
どんな感じに
写っているでしょう

いろんなポーズを
とったけど
一枚ぐらいは
素敵に
とれていてほしい

あなたに
あげたいような
写真であれば
あげましょう
思い出にしてください

あの人
ベルリオーズが
好きだったなあ
と言えるあなたなら
いいのです

第5章24

－淋しいのですか－

白い靴下に
横の赤いラインがいい
あなたの足がのびて
まぶしく映ります

紺のスニーカーも
楽しそう
学生時代の
なごりだろうか
みていて楽しくなるよ

汚れのない・・・
きれいな
あなたでしょう
大きな瞳が語ります

淋しさと陽気さが
同居しているような
感じやすい
あなたなのでしょう

冷たく感じることも
ありますよ
いつもの明るさを
出しませんか
淋しいのは
私だけでいいのです

淋しさを
木の葉にのせて
流そうか・・・
明るい笑顔は

私だけに下さい

第5章25

—私にもわからない—

窓にもたれて・・・
冬の日差しを
受けながら考える

この暖かさは
誰がくれるのだろう
そばにいる
あなただろうか

あなたの
いないところでは
考えることはしない
惰性に押し流される
自分をみつめるだけ・・・

あなたがいないと
心まで空っぽに
なるのだろうか

誰かを愛し始めた
様な気がする
どうしてだろう
私にも
わからないのです

第5章26

—あの娘が泣いた—

すねて泣いた
あの娘の涙が光っている
そんな顔もまたかわいい

泣ける娘は
純情なのですか・・・
我が通らないで
泣くこともあるのですか

悲しくて
泣くんじゃないのですね
意地悪されて
うれしいのだろうか

泣くことで
周囲から逃げるのかな
一人の世界で
考えるのですか

泣きたければ
泣けばいい
それが
うさ晴らしなのだから

かわいく泣きなさい
泣いているあなたは
どこに・・・いますか

第5章27

－星が降る日－

星が降る日は
いつでしょうか
正月でしょうか
スモッグにさえぎられ
めったに星が降らない

星が降れば
おもてに出て両手をひろげ
星をいっぱい取っちゃおう
穂高では星が降ってきた
大きいのやら
小さいのやら・・・

星空を見上げていると
空から金色の馬車が
やって来て
遠い、遠い国へ
つれていってくれるのです
お姫様といっしょに・・・
遠い国へ行けるのです

第5章28

－愛する姫君へ－

私のお姫様は
かわいくて陽気な
お姫さんです
暇なとき
電話して下さい
どこへでも
お供いたします

昔のままの
お姫様で
いてくれるのなら
どんな無理でも
聞きましょう

愛する胸のうちを
言えばいいのに
言えないもどかしさ
私にとってもつらい
姫にとっても
つらいでしょう

でもこれでいいのです
私は憧れを求める
男なのです
楽しい思い出を
ありがとう・・・

第5章29

－そしてgoing－

あなたの瞳に
僕をみたから
輝く瞳に
僕はgoing

あなたの影が
僕を包むから
あなたへの憧れに
僕はgoing

あなたの面影が
美しすぎるから
あなたへの恋に
僕はgoing

僕はあなたからの
愛をみつめてから
そしてgoing

第5章30

—あなたは風なのですか—

風は あなたからの誘い
風の向くまま 歩いて見るわ
風は あなたの熱きメッセージ
風の言葉を 聞いてみるわ

風は あなたの腕まくら
風の流れに 眠ってみるわ
風は私を 溶かしてくれる
風は私を 愛してくれる

第5章31

－呼んでもかえらない－

呼んでもかえらない
あの人だけれど
ボクの心に残るあの笑顔

子供ばい仕草がなつかしい
けなげなあの方は
もう帰らない

きれいなままで
別れたあの方は
他人の妻となっているだろうか
過去にあともどりして
呼んでみようか
あの人を・・・

でもボクの心に
むなしさだけが
かえってくる

恋とはいえない
ふれあいだけで・・・
それ故になつかしい

第5章32

— 孤独 —

愛とは

恋とは

死とは

生とは

欲とは

悪とは

未来は

過去は

今は

考えるとは何だろう

空白の時間が流れる

一人の大切な時間

地球の回転が速いのか！

僕の日が過ぎてしまう

第5章33

—あなたに甘えよう—

涙をそっと
あなたに返したら
あなたも泣いて
くれるでしょう

私のくやしさが
あなたの
くやしさになって
泣いてくれるでしょう

そんなあなたが好きです
笑顔の少ない
あなただけれど
心では笑ってるのでしょう

そんなあなたの気持ちが
解るようになったみたいです
甘えられる
あなたは大人です

私の甘えは
わがままなのかしら
でもあなたは聞いてくれる

時々意地悪されるけど
うれしいのです
これからも甘えます
心から・・・

第5章34

—あまりにもはやい—

部屋の中なのに
冷たい風が
足元を通り抜ける
12月も
あとわずかだというのに
暖もとらないで
独り音楽を聞いている

この一年が
短い一年が
過ぎていくというのに
忘れ得ぬ思い出を
一年のなかに探しながら
タバコに火をつける・・・

マッチの火が消えるように
あこがれを求めた一年も
あっけなく終わってしまうのか
いつものことのように
このくり返しがたまらない

でも単調である
このくり返しが
一人の人間としての
何かを目覚めさせるものに
なりはしないだろうか・・・

来年こそあこがれを
探し求めているだろうことを
祈らずにはおれない

第5章35

－出来れば早く－

笑顔の可愛いあなた
素直なあなた
俺という人間を
理解してくれるあなた

やりくりが
上手と思えるあなた
幸せにするよ・・・
ものすごく
好きになりそうです

出来れば早く
結婚しましょうか
近いようで
遠くにいるあなたへ
私の夢でも
みてくれてるだろうか

あなたの心が
いとしくてなりません
昔からの
恋人みたいなあなたへ
今日は楽しかったよ
ごくろうさま
明日も頑張りましょう

第5章36

—メルヘンの世界の中で—

正直で純粋である大人が夢を見た
メルヘンの世界の中に
憧れがあるのを発見する

これが恋なのかを知りつつも
少女を
幸せにすることが出来なかった
遠い昔に、10代の頃の昔に
かえって来たような
ほのぼのとした空気にふれると
まだあの少女が歳をとっていない
昔の少女のままであるのに気づき
今度こそ
幸せにしてあげようと思うのだ

いや、この少女は
昔のときの少女じゃない
この少女は生まれかわって
ぼくの前にあらわれたのだ

あこがれていた少女が
ぼくの求めていた少女が
目も前にいる
少女の気持ちは解らないが
幸せにしてあげたい
ぼくのお嫁さんにしてあげたい

しかし果たせるかな
昔の少女を
幸せに出来なかったぼくだから
でもメルヘンの世界なら出来る
きっと出来る

現実にかえって
それが出来れば
すばらしいことなのに・・・

少女は夢の中に
しまっておくほうが
幸せでしょう
現実にかえして
傷つくのは、僕なのだから

第5章37

—少女に夢をみつけた—

少女に
憧れている私
ちっぽけな
希望も叶えられず
孤独を愛さずには
いられないような
気がする毎日

ちょっぴり
ファッションに
凝ったり
レコードを買ったり
そんな気持ちで
孤独から逃げようと
しているのだろうか

憧れは
夏の終わりごろでは
なかっただろうか
太陽のかがやきで
どうかしていたのでしょうか
心が痛むということは

でも少女の瞳を
まだはっきりと
見ていない自分に
気付いたのです

一度でいい
少女の瞳を
はっきりと見つめたい
そんな気がするのです

少女の清らかな
瞳のなかを自由に
飛びまわりたいのです

第5章38

—明日にむかって—

過ぎ去った
時間を追うのはよそう
過ぎようとする
時間に希望をのせて
私の愛が、
ちっぽけな愛が
はばたく

誰の気がねもなく
遠慮もなく
好きな女性と
愛を語り合える日々を
夢にみながら
明日に向かって
歩き出そう

明日に向かって
歩き出そう
この手で幸せを
つかむまで・・・

第5章39

—土曜休暇は—

いつのまにか
再び眠りにはいる
昨日の楽しかった日々を
思い出すかのように

君とのことを夢に求め、
愛しあえるのだろうか
目覚めたとき
君とのことを好きで
なくなっていないだろうか

今日、明日・・・未来
いつもの素敵な君で
いて下さい

第5章40

— X'masイブは —

君と二人きりで
雪国をたずねたい
白い雪に
足を埋めながら、
歩くのもいい

雪でオーバーコートを
濡らすのもいい
君となら
どこまでも行けそう

君との軌跡を
ふりかえり
ここまで来たのねと、
おもわず
抱きあうのもいい

二人の吐く息が
まざりあい
互いに
愛を確めあう

—あとがき—

今になって読み返してみると、子供っぽい、ラブレターのような、日記的な
また、これでも詩ですかというようなポエムばかりですが、これも僕の青春の
一ページではないかと思います。

人は誰でも詩人であり、特に愛する人が出来たとき、素晴らしい詩人に
なれると言います。

僕は特に女性に対して少年時代から憧れを求め続けてきたし、今もそう
ある。詩はイメージーションで考え、恋愛を体験して考え、片思いをして考え、
その日の感情のおもむくままにあまり深く考えないでペンを走らせた結果、
詩のようなものが出来ていた訳です。

誰でも、好きな人にはプライドや恥ずかしさもあってなかなか積極的に自分
の思っていることを言葉でうまく伝えることが出来ないものである。

僕もこの種の人間である。そのため僕は少年の頃、素直な気持ちを伝える
訓練としてラブレターをよく書いた記憶がある。

ここに収録した作品の多くは20歳代の夢多い、悩み多き時のものですが、
秀作もひとつぐらいはあるのではないかと思う。

最初の作品集でてこずりましたが、今回はもっといいものが出来ることを自分
でも期待しているし、いろいろな人との出会いを大切に頑張りたいと思う。

1991年7月

2018年5月 飛鳥 圭

(付記)

飛鳥 圭に関する詩集の出版履歴など

1991. 7 憧れと愛を求めて 発行：朝日カルチャーセンター

1994. 3 詩集：風と愛と君と 発行：近代文芸社

電子書籍

2018. 5 明日の夢時計 発行：パブー（第3集の執筆完成）

2018. 5 憧れと愛を求めて 発行：パブー（再版の編集、執筆完成）

2018. 5 夢は遙か彼方へ 発行：パブー（第4集の編集と執筆中）

2018. 5 風の旅人 執筆中 発行：パブー予定（第5集）

初の小説

2018. 5 追想の日々（上） 発行：パブー

2018. 5 追想の日々（下） 編集と執筆中

憧れと愛を求めて

<http://p.booklog.jp/book/121805>

著者：飛鳥圭

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sanbika21/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/121805>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト